

オプション教材フジ 暗唱長文集



●暗唱の手順 1 日分

・ 1 日目は、まず、**1**の文章を30回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。

正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。

イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。

お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。

15回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ30回続けて読んでください。

なぜ回数を決めて繰り返すかという、と、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。

30回音読しても暗唱できない場合は、もう10回音読してください。

これでその**1**の文章が暗唱できるようになります。

それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

●暗唱が難しいときは

暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。

そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

●暗唱の手順 1 週間分

- ・ 1 日目に、**1**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 日目は、**2**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 3 日目は、**3**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 4 日めは、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
- ・ 5 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 6 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 7 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すると、**1**から**3**の全部の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の手順 1 か月分

- ・ 1 週目に、**1**から**3**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 週目は、もう**1**から**3**はやらずに、今度は**4**から**6**の文章を暗唱します。
- ・ 3 週目は、同じように、**7**から**9**の文章を暗唱します。
- ・ 4 週目は、**1**から**9**の文章を全部通して、毎日4回ずつ音読します。
- ・ すると、1 か月で**1**から**9**の文章が暗唱できるようになります。

●暗唱の活用

・ 暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の1部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

●より詳しい説明は

より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」(<http://www.mori7.net/mori/mori/annsvou.html>)をごらんください。

1 僕の名前は、太一である。氣取った感じがなく、適度に男らしい名前だとひそかに気に入っている。だが、どうしてこういう名前をつけたのか、くわしいところは自分でも知らなかった。ただ、漢字が簡単なので書きやすくていいな、と思っていたくらいである。

2 ところで、人の名前を考えるとこのは思った以上に頭を使う、大変な作業だ。実は僕も「名付け親」になった経験がある。弟が生まれた時、お兄ちゃんが名前を決めていいよ、と言われたのだ。この時の奇妙な緊張感といったら今でも忘れることができない。

3 両親に他意はなかったのだから、いきなり兄の重責を背負わされた思いがした。

これが、犬や猫の名前ならばいい。欧米風の名前でも、愛称のようなくぐく簡単な名前でも問題はないだろう。だが、生粋の日本人である弟に「アンソニー」だの「ロマーノ」だのと名付けるわけにはいかない。

4 「タマ」や「クロ」などは論外である。「たまさぶろう」「くろすけ」としたらまだしも人間に近づくが、そんな時代劇のような名前では困る。

すっかり行き詰まった僕は、父に相談することにした。母はまだ、生まれたての弟と一緒に病院にいた。

5 父はそこまで悩むことはないだろうと笑いながらも、ほかならぬ僕の名前をどうやってつけたかを話してくれた。そこで僕は初めて、自分の名前の由来について知ることになったのである。

父は、「お前の誕生日は、何月何日だ」と聞いた。

6 僕の誕生日は一月一日、元日である。おめでたいことがいつべんに来るように、産む時期を決めていたのだという話は前に聞いたことがあった。

「今ではあまり見ないけど、長男に太郎とか一郎という名前をつけるだろう。」

7 お前はうちの長男で、しかも一年の最初の日に生まれたから、太郎の太と一郎の一を合わせて『太一』にしたんだよ。」

そう言つて、父はどうだ、おめでたい名前だろう、と胸を張った。安直といえど安直だが、よく考えたものだとは僕は感心した。

8 その話を聞き、僕もこの方式でいこう、と考えた。弟の誕生日は十月一日だ。それならば……「十」と「一」を合体させた「士」という字を使う。僕はさっそくそのアイデアを、電話で母に伝えた。

弟の名前は「英士」に決まった。「えいじ」という読みも僕のおかげだ。

9 響きが格好いいし、「太一」と並べた時の語呂も良い。漢字は、両親が字画を見て決めてくれた。

今では英士も小学校一年生になっている。生意氣を言うようになり、怒りたくなることもあるが、兄としてきちんと面倒を見てやりた

い。

0 長男を表す「太一」という自分の名前を心に思い浮かべると、その思いがいっそう強くなる。人間の名前とは、生き方にも影響を与えるのだなと思った。

(言葉の森長文作成委員会 へ)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 我が家のリビングには、僕の赤ん坊の頃の写真が飾られている。よく「小さいころの写真を見るのは恥ずかしい」という人がいるが、この写真に限って言うなら、僕はそうは感じない。物心ついたときからそこにあり、毎日見ているため、もはや慣れてしまって、今さら照れくさい気持ちにはならないのである。

2 むしろ、写真の中の赤ちゃんは、我ながらとてもかわいらしいと思うほどだ。何がそんなに嬉しいのか、というほど目を細め、口を上げて微笑んでいる。それがヒントもばっちりのアップで写された、良い写真である。3僕はときどき「こんなに可愛い赤ちゃんが、今ではすっかりかわいくない少年になってしまったね」と冗談を言う。母はそれを聞いたたびに、そうねえと大笑いをするのだ。

ある日、僕はひとりで留守番をしていて暇だったので、その写真をしげしげと眺めてみた。4本当に自分なのか疑った、というわけではないが、成長した現在の顔と、どれくらい変わったか見比べてみようと思ったのだ。

色々と見回してみても、一つ、昔と今でまったく変わっていない部分を発見した。それは、鼻の頭にある小さな傷だ。5今では痛くもかゆくもない傷あとであるが、写真ではついたばかりのようで、よく見ると結構痛々しい感じだった。こんな傷があるのにこにこしているとは、やはり赤ん坊は無邪気なのだ、僕は他人事のように思った。

6やがて母が帰ってきて、僕は気付いたことを報告した。すると母は、やけに重々しい口調で、「実は今まで隠していたことがある」と切り出した。それは、僕にとって衝撃の事実であった。

なんと、僕の鼻の傷は、まさにこの写真を撮った時についたものなのだという。7カメラを構えた父に向かって、赤ん坊の僕はすごい勢いで這っていったらしい。母が止める暇もなかったという。

そして僕はそのままカメラのレンズに激突し、火がついたように泣きわめいたのだそう。

8そう、微笑ましい一枚だとばかり思っていたこの写真は、笑っているのではなく、痛みと驚きで泣き出す寸前の歪んだ表情をとらえたものだったのである。

人間の先入観とは恐ろしいものだ。ただ、それが分かった上で見てみても、写真の中の赤ちゃんはやはり幸せそうに見える。9痛みや失敗も含めて、愉快な家族の思い出になっているからだろうか。

今まで注目してこなかった写真にも、さまざまな隠された物語があるのかもしれない。僕は今度の留守番のとき、改めて古いアルバムを開いてみようかと考えた。

0

（言葉の森長文作成委員会 へ）

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 私は朝寝坊などしたことがない。いつも早寝早起きを心がけ、時間的余裕を持って行動している。それはなぜかというと、以前、父から「会社に遅刻して上司を激怒させた」という話を聞いたことがあるからだ。

2 父はそのことをまるで笑い話のように語るが、私は、とてもそんなのん気にはなれない。私の学校の先生は、みんな厳しいのだ。そんな先生たちに叱られて、震え上がるような思いをするのは絶対に嫌である。

3 理由はもう一つある。そうした生活パターンのおかげで、私は六年生になるまで、ずっと皆勤賞を続けていた。卒業まであと数ヶ月。六年間の皆勤は、私の大きな目標でもあった。

しかし、私のそんな頑張りがあつさりと無駄になる出来事が、つい最近起こってしまった。4 その日も私は寝坊をしなかった。定刻に起きて、家を出発したのである。それなのに、乗り込んだ電車が止まってしまったのだ。

車内アナウンスが、電線に異常があり走行できなくなった、と伝えていた。私は呆然とした。5 このままでは遅刻はまぬがれない。それも、ひどい大遅刻だ。せっかくこれまで気をつけてきたというのに、しかも自分の責任ではないのに！

携帯で母に電話をかけると、速報が出ているから学校も分かっているはずだ。6 あなたは怪我をしないように気をつけなさい、と優しく言ってくれた。そうやって落ち着かせてもらうまで、私の頭は焦りと苛立ちで混乱していた。

しばらく待っても電車は動く気配がない。ついに、私たちはその場で電車を降ろされ、次の駅まで歩く羽目になった。

7 「今からドアを開きます。お体をお離しくください。お降りになる際は、押し合わずゆっくりとお願いいたします。」

そんなアナウンスを聞いて、私は「いつもは乗るときに同じことを言っているのにな」と少し面白くなった。8 このころには、普段のペースから外れた特別な状況を、どこか楽しめるようになっていたのである。

長々と続く線路。普段なら決して見ることができない光景だ。その上を歩いていると、昔見た古い映画のワンシーンが思い出されて、思わずうきうきしてしまった。

9 学校に到着したのは、一時間目の授業が終わるころだった。教室に入った私を、担任の先生は気の毒そうに見た。母の言ったとおり、遅刻の理由も、そして私が皆勤を目指していたことも知ってくれていたのだらう。今日、遅刻したのは自分のせいではない。10 しかし私は不思議と、素直に「すみません」と謝ることができた。

人間にとつて、たまには時間に縛られず、解放的な気分を味わうのもいいのかもしれない。皆勤賞の夢は途絶えたが、代わりに貴重な体験をすることができた。「急がば回れ」ということわざもある。私は一度くらい、のんびり朝寝坊をしてみるのもいいかな、とふと思つた。

(言葉の森長文作成委員会 〃)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34